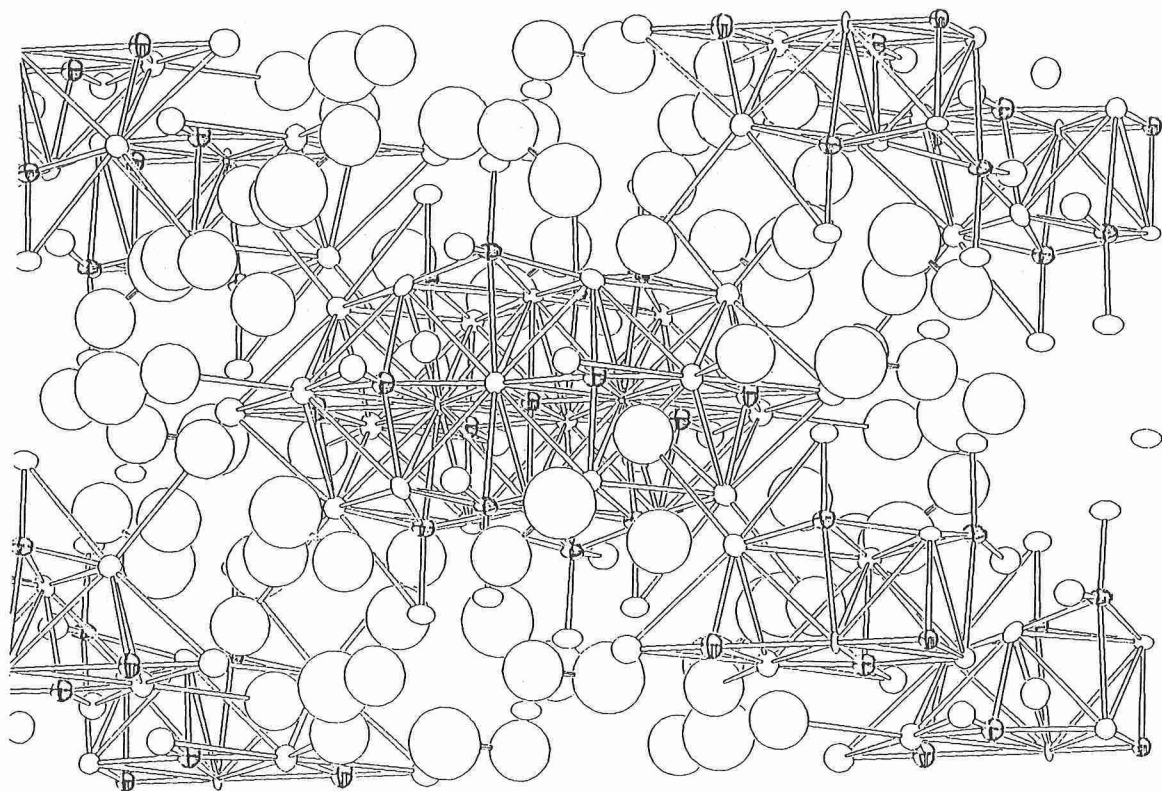


廣報

東京大学理学部



目次

表紙の説明	1
よりよい教育研究環境を	2
理学部について思うこと	久保 亮五 4
“DEN” から出て考えよう	田丸 謙二 5
21世紀の理学部に向って	飯山 敏道 6
貿易摩擦の時代に思う	廣田 榮治 7
《学部消息》	10

表紙の説明

化合物の結晶の単結晶X-線構造解析の結果発表する時は、凡ての原子の空間的配置をORTEPなど有名なソフトを使ってコンピューターに図示させると煩雑で見難い事が多い、その様な場合数学的に独立な原子や分子のみを示して済ませる。すると図は簡単になるが結晶の内部は大変すさまの多という印象を与える事になる。此の図は $K_7MnV_{13}O_{36}H_2O$ の組成を持つ無機化合物の結晶構造のすべての原子を示して居る。豆細工の様に見えるのが $MnV_{13}O_{36}^{7-}$ のイオンで、化学結合は棒の様に描かれている。 K^+ イオンは余り見えないが棒のついていない楕円体がそれである。

大きな球は水分子の酸素で、いかに結晶内は込み合っているかがわかる。
(こんな図を学術雑誌に投稿したら直ちに却下です)

化学教室 佐佐木 行 美

よりよい教育研究環境を

有馬朗人

臨教審を始め、世論は大学および大学院のあり方について大変にぎやかである。しかしこのような声を待たなくとも、我々自身が大学や大学院が今のままで良いとは全く思っていない。大学の多様化、国際化は、まさに我々自身が機会あるごとに言って来たことである。にもかかわらず、今日では世論によって批判される状況である。これは一方では大学側の対応の悪さもあるが、ゼロシーリングのマイナスシーリングのという雰囲気の中で、大学の研究教育の発展が大いに阻害されているのが本当のところである。

一方巨大科学のみならず中小科学も研究所に集中的に投資が行われている。大学では1億円の特別設備費がなかなかとれないのに、一方では200億500億という話がどんどん進んで行く。

私は数年前発表論文数を一つの尺度として種々な研究機関の生産性を調べた。その結果大学特に東京大学の能力は、他の研究機関に比べて高いことがわかった。しかしこの状況は研究機関の活性化に重点が置かれ、大学の予算がゼロシーリングのままで進行すれば、早晚逆転するであろう。ここで一つ提案したいことは各教室で自分達の実力をもっと宣伝することである。各研究所がパンフレットなどを作っていかに努力をしているか見習いたい。また論文、特許、被引用度などから、各教室が他の研究機関に対して如何なる地位にあるかを把握し、その実力を示して社会にうたえたいと思う。もはや東京大学がだまっけていても日本の主導者である時代ではないことを認識する必要がある。

大学院についても分子科学研究所を中心に総合大学院構想が急速に進行している。その構想はまさに我々が理想としたものを多く含んでい

る。本来研究を集中的に促進するため、我々も協力してそのような研究機関の充実に協力して来た。その間大学特に学部側はかなりのがまんをして来たのである。私は総合大学院に反対を唱えようとは思わない。ただし大学特に学部の研究環境を研究所並みに充実して欲しいのである。

今研究環境について述べた。他の一例を挙げよう。今日は国際交流ばかりである。口を開けば国際交流と誰も彼も題目を唱える。その実国際交流を行うために、我々大学人に自由な財源は殆どない。森巨総長は今年4月の入学式で学術研究において、日本は世界に借りがあり、それを返却しなければならないことを力説された。私は大変我が意を得たと思ひ嬉しかった。しかしひるがえって我々の現状を見たとき、まことに忸怩たるものがある。多数の外国の博士研究者が、一、二年東京大学で研究したいと言って来ても、我々には日本学術振興会に頼むか、文部省留学生に応募してもらうかしか方法はない。どちらもきわめて可能性は低いし、その決定に関して我々には全くの権限はない。これは日本全体の問題であるが、一方外国人客員部門や、学振による枠に存る研究所と学部の差が私には我慢できない。昨年理学部は数学教室よりの外国人客員部門の要求を出した。しかし実現には到らなかった。その最大の原因は研究所ならともかく、学部にはその例が殆どないことである。我々理学部の教官殆どは、外国の支持のもとで外国における研究生活を送った経験を持っている。森総長の言われるように今こそその借りを返さなければならない。国際交流を促進するため外国人客員部門が理学部に設置されることを望む。やっと科学研究費で外国人に滞在費を払えるようになったのは、一大進歩である。最近まで

パー・ディエム（日当）を出すのは大変むづかしかった。しかし今でもその額は本当に僅かである。外国人から東大を訪ねたいという手紙をもらう度、私は金策にかけまわらなければならない。外国人にとって訪ねればパー・ディエムをもらうのはあたり前であるからである。ある外国人が来たとき、ある学部にとのんで講演謝礼金を包んでもらった。帰って来てその男はかかんにおこって私に言うには「私の講演は一泊の費用の半分にもならないのか。君達が私達の大学へ来たら、宿泊と生活費はいつでも十分出すだろう。」私はただ日本の後進国性について述べるだけであった。私は東京大学理学部は、このような面で世界に恥かしい存在であると思う。せめて共同利用研究所並みになれないものであろうか。

私は大学全体そして理学部の研究がソフト化しつつあるのを怖れている。その原因は初めに書いたように、設備が十分に得られないためである。1に費用が得られないこと、2に十分の維持費が得られないこと、3に置く土地があまりにも窮屈なためである。私は自然科学はまず自然に触れることであると信じている。巨大科学は集中的に投資が必要であらう。しかし何故もっと小さな生物や分子科学そして物性科学まで中央化されなければならないのであろうか。再び言う。一方で何十億何百億の話、日米科学協力など大規模なものはどんどん進む一方、もっと基本的な、大学が一番向いている小規模の研究が何故阻害されなければならないのであろうか。

今天文台が独立して国立研究所になる話が急速に進展している。また早かれ遅かれ原子核研究所が独立する計画が議論されるであらう。どちらの場合も大規模な設備を必要とし、そのためには国立研究所でなければ実行できないという情勢のためである。どうして大学ではできないのであろうか。独立すれば出来るくらいなら、特別の枠で他の学部を圧迫せずに、このような

大学附属研究所の改善が出来ないものであろうか。

私は一年間理学部の運営のお手伝をしていて理学部のあり方にも考えさせられる面があった。それは研究教育分野の細分化の方向へは行きやすいのに、一方で統合が大変むづかしいことである。歯に衣を着せずに言わしていただければ、生命科学や地球科学の細分性である。今や時代の寵児であるこの分野は、果して現在のような先祖伝来の分類法でよいのであろうか。しかし東大理学部の建物の分散の仕方を見ると、直ちに私の歯に衣を着せない批判は、ひっ込めざるを得ないのである。一号館、三号館、五号館に分散する地球科学諸教室、二号館、三号館、一号館の生物科学諸教室。私は科学教育研究の健全な発展が、このキャンパス問題のため著しく阻害されていると思う。

新キャンパスか、再開発か、両方やるか。遺跡問題をどう片付けるのか。キャンパス問題は遅々として進まない。立川移転問題の失敗にこりた我々は、なかなか新キャンパスについて突進する気になれない。しかし再開発もまた煮え切らない。私はこのため理学部の若い教官達があきらめ気分になることを恐れている。

私は東京大学理学部の実力を信じている。その総力を結集して、我々独自の進展の方法を探りたい。研究は研究所で、教育は学部でという時流に全力を挙げて反対したい。一流の研究が出来ない環境で、最先端の基礎科学の教育ができるとは私は信じない。東京大学理学部が教育と研究において、真に世界の中で独自性を主張できる環境を得るべく、皆様の蹶起をうながしたいのである。そのためにはだまっけてはいけない。あらゆる機会に世にうったえる一方、我々が真に世界を主導する研究及び教育での成果を挙げなければならない。理学部が本当に面白い計画を出せば援助すると励ましてくれる人々が多数いることを書き加えておく。

理学部について思うこと

久保亮五（名誉教授）

1. 大学の地盤沈下ということがいわれる。笑って済まされないものがある。基礎科学についてはどうか。また、東大理学部はどうか、世界の中の日本、日本の中の東大、と考えると心配になる。東大だけのことではないが、日本を代表する大学の一つとして、やっぱり大いに頑張ってもらいたい。現役の方々をお願いする次第である。

2. 東大は大きすぎるせいか、何にもまとまらない。将来像も何にももっていないのではないか、という批評を外からきく。当然、ともいえない。理学部だけでどうにもできることではない、といえばそうでもあるが、理学部の責任と重みは、意外に大きい、といってよいであろう。特に学部と研究所との関係は理学部にとって大変、重要である。

3. 理学部の学科、教室の構成は、これからの時代の学問の発展に対応できるだろうか。教官の交代によって中味は次第に変わってはいるが、学科、教室の壁を越えて理学部として積極的に対応することはできないであろうか。講座、定員の新規要求も必要であるが、要求だけでは中追付かない。大学全体としても、同じ問題があるのであるが、何しろ部局自治の固定観念が強すぎる。

4. 大学院の問題として、今の専門課程の構成と別に、いわばこれに直交して研究教育プログラムを立てたらどうであろうか。いわゆる横型大学院のようなものであるが、固定的な制度の新規要求として設置する、というのではなく、現に各専門課程におられる教官の自発的な協力を、なるべくフレキシブルなものに組織するのである。いわゆる学際領域にはどうしても必要なことであろう。研究費、施設などの予算化の

問題もあるわけで、フレキシブルな組織とはいうに易く行なうに難いのであるが。

5. 前項は、かつての東大総合大学院構想にも含まれていた。この構想は新キャンパス問題とからんで大きな新規計画の形をとったので一場の夢に終わったが、あちこちにいろんな影響を与えた。その理念には生かすべきものがあつたと思う。基礎科学のある分野で、理学部の中でできることがあればそれから始めて、他部局との協力も次第に進めていけばよいであろう。

実をいえば、そのような考えは理学部の古い将来計画にもあつたし、また原子力のように全学的に出発しながらあまり成功ではなかった例もある。理想だけでは中々、うまく行かないが学問的な必要から生れるものを育てることは不可能ではあるまい。

6. ことさら学際ということを好まないのも、理学部の貴重な伝統の一つである。それはそれとして尊重しなければならないことは当然である。

何でも勝手に言え、というお話だったので書かせて頂いた。放言するのとはちがって中々書きにくいので粗雑なものになってしまった。退役したものが無責任なことをいうのは申し訳ないこととお詫び申上げる。

“DEN” から出て考えよう

田丸 謙 二

近頃のパソコンの性能や値段の動きを見ている、世の中が急速に動いていることがわかる。今世紀中には太平洋も二、三時間で横断するようになるとか、地球はますます狭くなって来る。技術だけでなく学問の進歩も文字通り日進月歩、学術論文の数も年々加速度的に増えて行く。10年もすると学問の姿自身がすっかり変わってしまいテキストブックもその内容が大きく書き換えられることも珍しくない。理学部の将来も、このような激しい動きの背景の上に立って先見性をもって考えて行かなければいけないことはいうまでもない。

このような状況の下で、例えば理学部における研究・教育の一つの中心的課題である大学院の問題について考えてみる。同じ若い人達を育てる仕組みにしても欧米の各国ではそれぞれの特徴をもってやっているが、どのような仕組みが最も将来の展望をもったものであるのか、折にふれて考えてみる必要がある。わが国の今の大学院の組織は学部（あるいは学科）の上へのせられたものであるが、その学部そのものは遥か明治の時代の学問を基礎にして柱建てされたものである。今日までそれなりにやって来ている裏には、それだけの便利さが介在している現実もあるとはいうものの、矢張り現在の形が若い人達を育てる上で最もよいものであるかどうか、相当考える余地がありそうである。百歩ゆずって組織いじりは容易でないとしても、現在のまま組織の中でも、実質的に改善する方策は沢山ある筈である。

修士課程のスクーリングにしても、狭い学問分野にかじりついたらま一生やって行ける時代ではなくなって来ていて、激しい学問の流れに適応し、自分で新しい流れを作っていくにはほど

のような教育をすればよいのか重大な問題である。博士課程にしても、現在の年数が院生にとって果して最適の期間であるかどうか大いに疑問である。一番の基本はこれからの大学院においてどんな人材を養成しようとしているのか。どのような仕組みの中でどのように育てるのが最もよいのか、教官の都合を基にした発想だけでなく、院生のために考えてやらなければいけないことはいうまでもない。

分野にもよるけれども、率直に言って現在の博士課程は長過ぎるのではなからうか。少くとも一年は短縮し、残りをポストク（この数を増やす必要がある）として異った研究環境で武者修業をしてから会社でも大学でも就職するようにしたらどうだろう。もっと多くの学生が博士になるようにし、それにポストクを加えて研究室が充実することにもなる。

約10年前私が理学部長であった時に、もっと早く博士を出すことに関して制約になっていた規則を改訂したことがあったが、私は博士課程を弾力的に短縮することを先頭きってやれる大学は数少く、その中でも東京大学は最先端の位置にいるように思えるし、それだけの責務を担っているような気がしているのである。

そもそもわが国の社会そのものが顕著に縦型構造をなしている。学問的にも人事の面でもそうである。博士課程を終えて一番の望みが出身研究室の助手になることであったりすることは少くとも米国などでは考え難いことではなからうか（もっとも教授の方でもそれを望む面も少くないが）。いわゆる新制大学での人事も、学問的に最低の資格さえ満たせばそのままトコロ天式にあがって行く。学問の専門分野についても似た面がある。縦型構造はそれなりのよい点

もあるけれど、早い動きに適應するのは容易でない。

人の動きにしても、ポストクとして横に動き乍ら武者修業をするだけでなく、出来るだけ競争的雰囲気の中で横への動きを伴って地位を得昇格して行く仕組みをもっと取り入れる方が若い人達にもはり合いを持たせることにもなるし大学自体も活性化して来ることになるのではなかろうか。

時代と共に社会がえらくなって来て、昔のように大学だけが高い所に位置していた時代ではなくなって来た。大学の人達は研究室の中ではそれなりに随分頑張っていると思うし、成果をあげていると思うけれど、世間の動きが激しくなって来ただけに、大学の中でのそれへの対応が遅れることはないであろうか。臨教審ならず

とも、わが国の学術振興のためにも、次代の担い手の育成のためにも、大学院（大学も含めて）の飛躍的充実は一日も早く実現されるべきことであり、大学慢性的貧乏感を払拭すべきことは絶対の条件であるが、一方で大学自体もその現代化に努める責任があるのではなかろうか。理学部としても、がっちり守るべき所は守り、変えるべき所は変え、単に時流に流されることなく、正しく判断することが強く求められているようである。若い人達のためにも、教官達は研究室のDENから抜け出してよく考えてみる必要があるだし、判断したことを的確に実行して行くことも必要である。大学を本当によくすることは大学の人々のみが出来る事である。

21世紀の理学部に向けて

飯山敏道

“東大は大学院大学になるべきだ”と言う結論が理学部将来研究委員会の検討結果として公表されてから10年以上の月日が流れた。自然科学の各分野の研究を行い、研究者を世に送り出すことを目的とする理学部としては当然の結論である。

何故当然か。一口で言えば、理学部の2年間の教育で、学生諸君に、研究に必要な基礎知識を何とか取得させることはできても、学生諸君の研究能力を育てることができないからなのである。

研究は教科書の演習問題を解くこととは、質的に全く異なることなのである。演習問題の方は解き方のすべてこそ与えられていないが、考え方の方向は与えられている。研究の方は、解く方針すら与えられていないし、そもそも研究課題を見出すことからして研究なのである。研究

課題の解答は次の課題を生み行きつく所を知らないが、演習問題は解ければそれで一応終る。

学生諸君の自尊心を逆なですることになるかと危惧するが、御寛容願いたい。私達の理学部をよくしたいためなのだから。この演習問題と研究課題の相異に関する認識の相異は学生諸君の質問、討論にあらわれる。学部学生や学部を卒業して大学院に入ったばかりの段階では、“こういう現象はどう考えるべきでしょうか”とか、“先生の言われたような結果にはなりません”と言う質問をさかんに発する。修士論文の作製にかかっていたり、博士課程に入った諸君は、“こう思って、このようなことをしらべました。結果は予想通りでなかったのです、こう思います”とか“この方向から考えなおしてみたいと思いますか”と言う話に変って来る。もっとも、博士課程の終段になって来ると、時とし

て、私達は彼が主張する結論を下すためには、証拠が不十分だと思って注意しても、彼は結論を固執して私達を当惑させる大家？も出て来ることも事実である。

この変化は無理もない。小学校から教養学部まで、教科を一方的に消化することを、強要され、自然は教えられた通りに動くと思いついて育って来た諸君である。わずか2年間で“自然は必ずしもそうは動いていない。私達の周囲には解っていないことが多い”と言うことや、“解っていないことをどうやって解明するか、それが仕事なのだ”と言う能動的な人に変えることは容易なことではない。この変換には時間が必要なのである。

この状態は教育関係者の方に責任がある。教育、ことに高等教育を初中等教育の延長線上に置き、教壇と演習を通じて知識を授ける事に焦点をおきすぎたと言うことである。戦後間もなく日本を去り、20年近く、この国を知らなかった私は、このことを強く感ずる。

科学の進歩と、私達の共通財産である知識の増大はすさまじい。若し私達がすべての基礎知識を学生諸君に与えなければならぬとしたらやがて、40歳になっても卒業できないと言う事態になるであろう。また教官の中で、そのような重責に耐えられる人もいないと思う。

では21世紀に向けて、大学理学部はどのように変貌すべきであろうか。私には、道は唯一しかないように思われる。それは、理学部は教官と学生諸君が共に歩んで行く所に変ることである。研究に学生諸君が参加し、実体との接触を保ち、共に考えて行くことを通して、研究者としての能力を身につけて行くような学部、大学院となることに徹すべきではなかろうか。これによって、今迄あまり助長することができなかった（原子核物理学をはじめとする一部の専門では、この事はとっくに解決されたようであるが）研究者の協調性の助育も実現されるであろう。

う。

このような変貌をとげるために、今の東大理学部は充分であろうか。欧米の大学と比較しても、今の状態はお粗末すぎないだろうか。

新しい実験機器を設備するには、まだ機能しているにもかかわらず、廃棄しなければ設置場所を作ることができない面積の不足。無理をして設置しているために、10人の学生に一度に見せてやったり、一緒に実験をすることができない諸装置。専門間の横の連絡が益々重要になって行く現代にもかかわらず、キャンパスの四隅に分散した各教室。理想的な理学部となるためには今の立地的条件はあまりにも、兎小屋日本そのまますぎる。

歴代諸教官の努力と、すぐれた業績のお陰で理学部が持つ設備はそう見劣りするものではない。しかし、その保守状態や機能を詳細に検討すると、必ずしも理想的とは言えない。

それにもまして深刻なことは、新しい機器、装置を導入するために非常に長い年月の間待たされることである。それも、導入できればよいが、終局的には、実現できないことがよくなくない。また、技術面の支援体制の不備のために新しい測定、実験のための装置を、実現できずアイデアがアイデアだけで終わってしまうことがあまりにも多すぎる。独創性、創造性が生命の理学部の研究が、科学機器メーカーのカタログやショーウインドウに並べられている機器だけで、勝負することを余儀なくさせられていることが、あまりにも頻般すぎる。他国では、とっくの昔に実現された機器、装置に対して自分達もこれを持って、彼等と別の研究に使いたいという欲求すら、なかなか研究者に湧いてこなくなってしまうのではないかと疑いたくなることも、しばしばである。入学試験の競走に前向きに立ちむかった学生諸君が、年とともに消極的になり、文献学者、観念論者になって行くのを見るたびに、胸がかきむしられる。これからの理学部が理想とする姿とあまりにも現実

が逆であるからである。

現在東大では、柏に新キャンパスを確保し、理科系学部（医を除く理、工、農）および、東大に属する研究所の一部、場合によっては、一学部全体の移転を図ろうと言うことが立案されている。立川移転その他の案が立消えになったいきさつから、“またどうなるか解らない”と傍観者の立場にまわられることなく、教官、職員、学生諸君の最大関心事として、これからの理学部のあり方、柏キャンパスに対する理学部の対

応について、よくお考えになり討論して頂きたい。理学部広報委員会は、有馬理学部長、理学部企画委員会の意向をよしとされ、広報の月号と更に9～10月頃の号に、諸賢の活発な御意見をのせて下さることを快諾して下さった。理学部がその体質を改善する好機が訪ずれようとしているこの機会である、皆様が関心をもって考えて下さることを祈ってやまない。この計画を实らせるも、立ち消えにさせるも、理学部全体の関心が高まるのが先決なのだから。

貿易摩擦の時代に思う

廣田 榮治（分子科学研究所）

昨年、はからずも古巣のHarvard Univ.からKistiakowsky Lectureshipを授与されCambridgeを訪れた時のことである。一夕知識人の集りに招れた家内と私は貿易摩擦問題で猛烈な集中砲火を浴びた。この時は、勤労意欲の低下したアメリカ人がレベルの低いQCで生産しても競走力がないのは当たり前と思っていたが、最近になって問題はそれ程簡単ではないのではないかと思うようになった。もちろんとるに足らぬ原因も多々あろう。しかし背景にはもっともっと根の深い要因がひそんでいるように思われる。均質で、同胞意識の強い日本の社会に住んでいると、自分のことがよくわからなくなるのではないだろうか。充分心しなければならぬと思う。

例えば人事問題を反省してみよう。私のごく身近に限っても、アメリカの大学の教授になって活躍している人が何人かいる。アメリカ社会のgenerousな一面で、アメリカの科学を振興している重要な一因であろう。これにひきかえ日本の大学機関での人事選考の現状は如何であろうか。国際的にはいうまでもなく、国内的に

もきわめて閉鎖的に終わっているのではないだろうか。このポスト難の時に外国人に場を提供する余裕はないなどという反論が聞えてきそうである。外国人の任用は国の法律ではすでに数年前に解禁になっている。大学の方がむしろ遅れているかというべきであろう。

静謐な雰囲気が高く物事を考え徹底した研究を行うのに不可欠なことはいうまでもない。このことは基礎研究の場合とくに重要である。しかし万物は流転する。研究自体その基になる体制の変革を要求する。この二面性は免れることはできない。とすれば改革を自らに課し、時代を先取りする方策を採るべきであろう。世上大学に対する改革の議論がかまびすしいが、この際肝要なのは大学の本質を見定め次の世代へ向けて態勢を整えて行くことであろう。自己の座している座ぶとんを持上げることはなかなかむつかしいことである。しかし遅疑逡巡の許されない時期が来ている。失敗を恐れず多くの試みをなすべきであろう。

一つ考えたいことは総合大学という形態である。幅広い教養を学生に植えつるためには多

くの学問領域から成る組織が必要だといわれる。しかし本当に総合大学が必要なのだろうか。さらに今の総合大学が上の目的に沿って機能しているだろうか。私は必ずしもそうは思わない。総合大学内の分野間の協力よりも、他大学あるいは機関との間の協力の方がより有効に働いている場合が多い。少くともこの点に関する今の総合大学の機能は、他の形態によって充分おきかえることができよう。むしろ総合大学であることが機能上重大な障害となり、ひいては大学全体の活力を著しく低下しているようにさえ思われるが如何であろうか。すなわち大学内の意志統一にあまりに手間がかかりすぎているのではないだろうか。個々の学部、学科の形態や運用はそれぞれの学問の性格から当然異ってくるわけであるが、それを強いて評議会でもとめ大学全体の意志として表明するというのでは、実際上何も意志表示ができないのと同じであろう。大学の規模が非常に小さい時ならばいざしらず今のようなマンモス化した状況で何故このような組織がそのまま温存されているのであろうか。総合大学の現状に対して深く反省することもなく、この時代遅れの組織を積極的に支持するかのごとき論調が未だ多々見受けられるのは全く理解に苦しむところである。もしこの肥大化した機構をそのまま保持しようとするのなら、その構成単位（学部、学科など）にもっと大幅な自由を許す必要があろう。

さてこのような状況で理学部はどのように振舞うべきであろうか。どのように変って行くべきであろうか。教育はどうするのか。研究態勢はどうか。理学部の守備範囲は必ずしも定か

ではないが、個々の学問に適したユニークな組織、態勢を案出すべきであろう。私は一つの提案をしてみたい。私の専門に近い化学、物理学などは大学院を主体としたものに移行すべきである。その年限はできる限り学生の能力に応じてflexibilityのあるものにしたいが、今の制度でいえば学部3年次からスタートする。すなわち2年修了時の優れた学生を大学院学生として受入れるのである。場合によっては1年次、2年次の学生でも差支えない。けだし物理学や化学の分野では優れた学生は若くして芽を出すことが多いからである。日本では何と無駄で、画一的な教育に長時間を費やしていることか。いうまでもなく、自己の大学の学部学生だけでなく、国内外の学生から優れた者をきびしい審査を経た上で入学させることにしたい。また人事の流動化、研究・教育の活性化をはかるため種々の新しい方策を導入し、他大学、他研究機関との交流を活発に行いたい。この大学院には1人のchairmanをおき、対外折衝等に専念させる。これには学内外から適材をえらび、長期間（5～10年）任にあたらせることが肝要である。一方研究・教育はすべて内部の教官の自主性に委ねる。ただしその成果については学外人を主体とした審査機関できびしくチェックすることにしたい。助手等若手研究者層の制度は現行を大きく変更することが必要であろう。

理学部の多くの学問分野では、原理的な思考がその基礎となっている。物事の本質を鋭くみつめることはそこで働く教官の責務である。理学部を中心とした積極的な行動から斬新な大学院大学の出現を期待したい。

《学部消息》

教 授 会 メ モ

61年2月19日(水)定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 会計委員会報告
(5) 企画委員会報告
(6) 東京大学理学部規則の一部改正について
(7) 評議員の改選について
(8) 付属植物園長の選出について
(9) 付属臨海実験所長の選出について
(10) 素粒子物理国際センター長の選出について
(11) 中間子科学実験施設長の選出について
(12) 地殻化学実験施設長の選出について
(13) 学士入学について
(14) 転学料について
(15) 奨学寄付物件の受入れについて
(16) その他

61年3月19日(水)定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 会計委員会報告
(5) 企画委員会報告
(6) 昭和60年度卒業生決定について
(7) 学部研究生の入学について
(8) 学部研究生の期間延長について
(9) 受託研究員の受入れについて
(10) 専修学校研修員の受入れについて
(11) その他

なお、当日、飯野、海野、木下、橋本、藤井、不破の各教授及び岡林講師のご退官に当たり、記念撮影(1号館玄関前)と送別の会(於 好仁会、18時から)が行われた。

61年4月16日(水)定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 昭和61年度受託研究員の受入れについて
(5) 昭和61年度学部研究生の入学について
(6) 昭和61年度民間等との共同研究について
(7) その他

61年5月21日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 学部学生の休学について
(5) その他

理学博士の学位授与者

〔昭和61年1月20日付(3名)〕

専門課程	氏名	論文題目
論文博士	村上 修	シクロトリシランおよびジシレンの研究
同	上 正明	多重ファイバーを持つ楕円曲面の微分同相類について
地球物理学	松浦 律子	大きい余震の発生前の本震の余震活動度の異常

〔昭和61年2月24日付(7名)〕

論文博士	浅野 義曠	プラズマ重合法による複合薄膜の形成とそのレーザー記録機構の研究
同	錦 織 紳 一	Hofmann 型包接体の構造展開
天文学	田 邊 俊 彦	急冷過程における珪素、酸素、炭素、及び水素混合気体からの微粒子生成——天体における微粒子生成の場への応用
論文博士	石 川 隆	K^+ 中間子崩壊における重いニュートリノの混合と中性ボゾンに関する新しい上限
同	深 谷 賢 治	一定数より直径と曲率が小さい多様体の集合の境界
同	田 中 茂	ある複素連分数変換とそのエルゴード性
同	パトリシアZ. ロドリゲス・トメ	1968年十勝沖地震モーメントの時空間分布推定のためのインバージョン

〔昭和61年3月17日付(26名)〕

論文博士	松 居 誠一郎	日本の後中新世寒流系軟体動物群の変遷
同	稲 吉 彰	Na蒸気に曝されたSO ₂ の霜の可視および近赤外反射スペクトルとイオンの表面組成
同	青 木 智	チャの越冬葉の光合成阻害機構の解析
同	高 島 浩一郎	クロマチンにおけるポリヌクレオソーム鎖の高次構造

専門課程	氏 名	論 文 題 目
論 文 博 士	二 宮 治重子	タバコ培養細胞のフェレドキシリンについて
同	永 長 直 人	有機結晶における中性——イオン性転移の理論的研究
同	石 原 丈 実	重力—有効水深の解析による小笠原—マリアナ弧の海山の密度決定
同	斎 藤 秀 司	代数曲面に対する一般固定点定理と2次元局所環に対するスワン表現の理論
同	野 尻 幸 宏	プラズマ発光分析を用いた湖沼における微量金属の地球化学的研究
同	田 尾 博 明	光化学反応/光散乱スペクトロスコピーの開発とその化学分析への応用
同	藤 本 克 己	ベネム及びカルバベネム系化合物の合成
数 学	益 本 洋	$GS_p(2, F)$ の既約スーパー・カスピダル表現について
同	古 川 吉 弘	代数曲線の分岐を持つ合同関係式について
同	古 関 春 隆	$GU(1, 2)$ と $GU(3)$ に対する跡公式の比較について
同	笹 野 一 洋	非特異モース・スモール流の閉軌道のなす絡み論と横断的葉層構造
物 理 学	鳥 塚 健 二	超短時間パルスレーザーによる原子衝突の非インパクト性の研究
地 球 物 理 学	山 野 誠	環太平洋地域の沈み込み帯の地殻熱流量分布に関する研究
同	北 村 佳 照	熱帯海洋循環に関する数値的研究
化 学	歌 川 晶 子	ヒョドリバナの germacranolide 誘導体の構造および合成研究
生 物 化 学	中 塚 公 子	筋小胞体 Ca^{2+} 輸送 ATPase の分子構造に関する研究
人 類 学	高 橋 秀 雄	ヒト大腿骨骨体部の生物力学的研究
同	石 田 貴 文	霊長類の系統とヒト腫瘍ウィルス
同	長谷川 真理子	マハレ国立公園における野生チンパンジーの成長と母子関係
地 理 学	鹿 島 薫	沖積層中の珪藻遺骸群集の推移と完新世の古環境変遷
相 関 理 化 学	久保田 弘	非接触電極測定法による擬1次元導体中の電荷密度波の凍結状態の研究
同	平 野 昭 裕	非平衡分布状態のポーラロン系の緩和機構の研究

[昭和61年3月29日付(99名)]

論 文 博 士	市 川 淳 士	スズ(II)化合物の特性を活用する新しい選択的合成反応の開拓研究
数 学	植 野 義 明	Young 図形上の逆マッチングの個数とそのq-類似

専門課程	氏名	論文題目
数 学	筒井 亨	交叉する singular loci を持つ初期データに対するコーシー問題
同	丹羽 芳樹	measure を初期値とする半線型熱方程式
同	吉 荒 聡	散在型鈴木単純群のGABの格子論的構成
同	上 野 一 男	アンブラルカルキュラスと特殊関数
情 報 科 学	齋 藤 明	グラフ理論における連結度問題
同	清 水 徹	知識工学に基づくソフトウェアの設計・開発環境に関する研究
同	橋 田 浩 一	限定的並列処理：言語運用の一理論
物 理 学	鈴 木 理	精子核内のDNA結合蛋白質とDNAの詰め込み
同	大 原 一 郎	ヒストン-DNA相互作用の分光学的研究
同	山 田 琢 磨	ショウジョウバエ視覚系蛋白質のモノクローン抗体による解析
同	久 我 隆 弘	NH ₃ 分子の高振動励起状態
同	梶 田 雅 稔	大きな双極子モーメントを持つ分子の衝突相互作用
同	上 田 良 夫	REPUTE-1装置による逆転磁場ピンチプラズマの内部磁場構造の研究
同	居 田 克 巳	鋸歯状波振動を利用したトカマクプラズマに内在する不純物輸送の研究
同	中 村 正 人	分子衝突における回転虹散乱
同	須 藤 靖	宇宙における構造の形成と不安定粒子
同	北 村 良 実	慧星コマにおける軸対称ジェットの理論的研究
同	水 谷 五 郎	銅ハライドにおける励起子の非線形光学効果
同	高 梨 弘 毅	金属人工格子界面磁性のNMRによる研究
同	高 田 洋 一	ピコ秒レーザー生成プラズマ中での非線形相互作用による第2高調波発生と電子加速の研究
同	住 山 昭 彦	低温におけるCe _X La _{1-X} Cu ₆ の高濃度近藤効果
同	柴 田 薫	中性子散乱による液体金属の動的性質の研究
同	田 中 繁	金属超微粒子におけるエネルギー準位の統計理論
同	鈴 木 康 夫	生体膜における分子の並進拡散運動
同	北 谷 英 嗣	競合する相互作用を持つイジング系のリエントラント現象
同	大 熊 建 司	三波相互作用模型の量子論
同	明 楽 浩 史	グラファイト・アルカリ混晶層間化合物C ₈ K _{1-x} Rb _x における異常ソフト化
同	永 江 知 文	FANCY分光ロメーターによる核内アイソマーの研究
同	坪 山 透	入射運動量2.0~3.8 GeV/cにおける重陽子陽子反応によるπ ⁻ 生成の研究

専門課程	氏名	論文題目
物 理 学	川 越 清 以	高エネルギー電子・陽電子反応による量子電磁力学の検証と軽粒子複合性の探索
同	梶 田 隆 章	反ニュートリノと中間子への核子崩壊の探索
同	榎 本 良 治	F* 中間子の発見
同	安 田 修	カルーザ・クライン理論における古典解の安定性
同	中河原 幹 晴	2次元カイラル模型のBetheansatzによる分析
同	内 山 光 一	超対称性理論におけるソリトンの量子論—質量補正とボゴモルニー不等式—
同	服 部 久美子	フラクタル上の場の理論におけるブロックスピンの方法
同	森 松 治	不安定状態生成の研究— (\bar{K}, π) 反応による Σ ハイパー核の生成—
同	高 柳 和 雄	原子核のスピニアイスピン励起モードの応答関数
同	田 邊 容 由	π Nおよび γ N相互作用のダイナミカルな模型に基づく π NN3体系のユニタリーな取り扱い
同	杉 田 道 昭	Z=40領域の形状相転移
天 文 学	澤 村 峰 夫	弱く差動回転している恒星系円盤の重力不安定性
同	浦 田 健 二	ブシネスク対流の低次元カオス
同	石 橋 史 朗	回転ガス円盤のモード解析：大局的モードの物理的性質と波一回転相互作用
同	戎 崎 俊 一	バーストしている中性子星のX線スペクトルと大気構造
同	楠 瀬 正 昭	熱的な相対論的プラズマ——電子——陽電子対集中の時間的发展
同	種 艸 純一郎	激しい緩和の統計的理論
同	林 正 彦	電離波面に付随した衝撃波と星生成の観測的研究
同	嶺 重 慎	わい新星 アウトバーストの円盤不安定性モデル
地 球 物 理 学	鈴 木 敏 弘	高圧下における金属—ケイ酸塩—水の反応とその惑星科学的意義
同	坪 井 誠 司	不均質地球モデルの自由振動とインバージョンへの応用
化 学	有 賀 哲 也	固体表面における秩序形成と吸着子の電子状態
同	折 山 剛	二価スズ化合物の特性を活かした新しい不斉合成反応の開発
同	加 藤 淳 一	低原子価スズおよび過塩素酸トリフェニルメチリウムを用いる新しい合成反応の開発研究
同	加 藤 千 尋	時間分解共鳴ラマン・吸収分光法による光励起分子とその反応の研究
同	魏 磊	全反射型長光路毛細吸収管による吸光光度法の研究
同	久 米 博	準安定励起分子の衝突による固体有機物表面へのエネルギー移動と発光

専門課程	氏名	論文題目
化学	鈴木博之	凝縮系におけるTMPDの光励起緩和過程とキャリアー再結合
同	關金一	不飽和分子の光化学素過程
同	関山秀雄	放射光用軟X線分光器の開発とケイ素, りん, 硫黄, 塩素を含む化合物のX線吸収端近傍の構造に関する研究
同	田島裕之	BEDT-TTF 塩の光学的性質および電子構造の研究
同	長谷川泰	長鎖 α , ω -ジアミノアルカン架橋3次元錯体ホスト包接体
同	橋本伸哉	リン酸イオンの分析化学的並びに生物地球化学的挙動に関する研究
同	見附孝一郎	高励起リユードベリ原子あるいは低速電子との衝突によるファンデルワールスクラスタからの負イオン生成
同	山内繁	^{151}Eu メスバウアー分光法によるユーロビウム化合物の酸化還元反応の研究
同	モハメッド・アブドウラ	誘導結合プラズマ発光分析法における微量試料分析のためのグラファイトカップ直接導入法の開発
同	刘平	セレンの分光化学分析並びに生物無機化学的研究
同	梁漢燮	太平洋における ^{230}Th と ^{231}Pa の海洋地球化学的挙動の比較研究
生物化学	土居真樹	大腸菌の形態形成に関与するmre遺伝子群の解析
同	神田大輔	基質認識におけるアミノアシルtRNA合成酵素の機能構造
同	竹内康裕	ラット4.5 SRNA _H および4.5 SRNA _L 遺伝子のクローニングとHeLa細胞内における発現
同	外山玲子	<i>Artemia salina</i> mRNA-5'-キャップ構造合成酵素についての研究
同	横山三紀	アミノアシルtRNA合成酵素によるtRNAの識別機構
同	若松馨	生理活性ペプチドとリン脂質との相互作用の $^1\text{H-NMR}$ による解析: 相互作用と生理活性との相関
同	渡邊雄一郎	タバコモザイクウィルスの複製過程および機構の解析
同	藤原晴彦	昆虫リボソームRNA及びその遺伝子の構造と進化
同	加藤宏幸	ヒト・リボソームRNA遺伝子の転写に必要な因子と転写開始複合体
動物学	吉川拓支良	ラット肝再生過程におけるクロマチン内非ヒストン蛋白質(特にDNAポリメラーゼ β)分布変動の研究
同	秋元義弘	ウニ胚の初期発生に及ぼす紫外線の影響
同	大和田隆	多毛類の分布決定における着底期の重要性
同	谷口泰史	ウニ精子に見られるH1ヒストン特異的プロテアーゼに関する研究

専門課程	氏名	論文題目
動物学	橋本有弘	マウスにおける卵成熟機構
同	松島俊也	ニホンヒキガエル摂餌行動の神経行動学的研究
植物学	加藤潤一	大腸菌の細胞伸長、細胞分裂に関する遺伝子の研究——細胞壁形成に関する遺伝子及び染色体分配に関する遺伝子の解析
同	梶江慎一	大腸菌の細胞膜結合亜硝酸還元酵素系について
同	竹中明夫	森林内の光環境の解析と個葉光合成特性の生態学的意義の検討
地質学	波江靖弘	熱水中でのタングステンの鉍化作用と運搬について：いくつかの日本のタングステン鉍床についての研究
同	神谷隆宏	アマモ場における介形虫の微生物息場所への適応
同	小山真人	古地磁気学と層序学に基づく伊豆半島周辺の変動史
同	津久井雅志	複成火山のマグマ溜りとその進化
鉍物学	尾形潔	放射光を用いたGeO ₂ の温度圧力条件による結晶構造変化の研究
同	澤田晴朗	X線回折法によるSenandorite (Andorite IV, PbAgSb ₃ S ₆)の結晶構造の解析
同	中西健司	かんらん石中における微量Mnの席占有率について
地理学	仁科淳司	冬季季節風下の日本の中気候における局地高気圧・低気圧の役割
相関理化学	林英之	ヌクレオソームコア粒子のラマンスペクトル
同	藤井伸平	かんたんな金属酸化物中の酸素の電子状態
同	山崎勝義	分子クラスター中および超臨界流体中における溶媒和の効果
同	渡邊紳一郎	発芽ヒマ種子の非特異性脂質転移タンパク質

人事異動

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	助教授	早野龍五	61. 2. 16	併任	本務：高エネルギー物理学研究所 助教授
地質	助教授	鎮西清高	61. 3. 1	昇任	京都大学教授
物理	教授	飯田修一	61. 3. 31	停年退職	
"	教授	橋本英典	"	"	
天文	教授	海野和三郎	"	"	近畿大学教授就任
臨海	教授	木下清一郎	"	"	

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
物 理	講 師	岡 林 孝 郎	61. 3. 31	停年退職	
植 物	助 教 授	笠 原 道 弘	"	辞 職	帝京大学教授就任
物 理	教 授	西 島 和 彦	61. 4. 1	配 置 換	京都大学教授へ
"	教 授	山 崎 敏 光	"	"	原子核研究所教授へ
情 報	助 教 授	佐 藤 雅 彦	"	昇 任	東北大学教授へ
素粒子	助 教 授	山 田 作 衛	"	"	原子核研究所教授へ
物 理	教 授	矢 崎 紘 一	"	"	助教授から
化 学	教 授	小 間 篤	"	"	筑波大学助教授から
物 理	助 教 授	早 野 龍 五	"	配 置 換	高エネルギー物理学研究所助 教授から
"	助 教 授	牧 島 一 夫	"	昇 任	宇宙科学研究所助手から
天 文	助 教 授	祖父江 義 明	"	配 置 換	天文台助教授から
地 質	教 授	飯 山 敏 道	"	併 任	評議員 63. 3. 31 まで
植物園	教 授	岩 槻 邦 男	61. 4. 2	"	植物園長 64. 4. 1 まで
動 物	教 授	水 野 丈 夫	61. 4. 1	"	臨海実験所長 63. 3. 31 まで
"	教 授	小 柴 昌 俊	"	"	素粒子物理国際センター長 62. 3. 31 まで
"	教 授	宮 沢 弘 成	"	"	中間子科学実験施設長 63. 3. 31 まで
化 学	教 授	富 永 健	"	"	地殻化学実験施設長 63. 3. 31 まで
数 学	教 授	増 田 久 弥	"	"	本務：東北大学教授 62. 3. 31 まで
物 理	教 授	西 島 和 彦	"	"	本務：京都大学教授 62. 3. 31 まで
"	教 授	山 崎 敏 光	"	"	本務：原子核研究所教授 62. 3. 31 まで
情 報	助 教 助	川 合 慧	"	"	本務：教育用計算機センター 助教授 62. 3. 31 まで
素粒子	客員教授	長 島 順 清	"	"	本務：大阪大学教授 62. 3. 31 まで
"	客員助教授	須 田 英 博	"	"	本務：宇宙線研究所助教授 62. 3. 31 まで
"	客員助教授	福 来 正 孝	"	"	本務：京都大学助教授 62. 3. 31 まで
中間子	客員教授	近 藤 淳	"	"	本務：通産省工業技術院 62. 3. 31 まで
物 理	教 授	田 中 靖 郎	"	"	本務：宇宙科学研究所教授 62. 3. 31 まで

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
物 理	教 授	高 柳 和 夫	61. 4. 1	併 任	本務：宇宙科学研究所教授 62. 3. 31 まで
"	教 授	西 村 純	"	"	"
"	教 授	清 水 幹 夫	"	"	"
"	教 授	河 島 信 樹	"	"	"
地 物	教 授	伊 藤 富 造	"	"	"
"	教 授	大 林 辰 蔵	"	"	"
"	教 授	西 田 篤 弘	"	"	"
物 理	助 教 授	小川原 嘉 明	"	"	本務：宇宙科学研究所助教授 62. 3. 31 まで
"	助 教 授	松 岡 勝	"	"	"
地 物	助 教 授	中 村 良 治	"	"	"
情 報	講 師	坂 村 健	61. 5. 1	昇 任	助手から
数 学	助 教 授	楠 岡 成 雄	61. 5. 16	"	講師から
素粒子	助 教 授	小 林 富 雄	"	"	助手から
"	助 教 授	武 田 広	"	"	助手から
"	助 教 授	蓑 輪 真	"	"	助手から
(助 手)					
化 学	助 手	正 田 晋一郎	61. 3. 1	復 職	
数 学	助 手	桐 村 康 子	61. 3. 31	停年退職	
物 理	助 手	村 山 和 郎	"	辞 職	日本大学講師就任
化 学	助 手	佐 藤 春 雄	"	"	東京理科大学講師就任
"	助 手	広 岡 知 彦	"	"	
素粒子	助 手	佐 藤 朝 男	"	"	
数 学	助 手	加 藤 信 一	61. 4. 1	昇 任	京都大学助教授へ
物 理	助 手	大 塚 洋 一	"	"	低温センター助教授へ
化 学	助 手	角 田 欣 一	"	転 任	通産省工業技術院へ
"	助 手	菱 田 俊 一	"	"	科学技術庁無機材質研究所へ
物 理	助 手	高 田 栄 一	"	昇 任	教務職員から
素粒子	助 手	山 下 博	"	配 置 換	文部技官から

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
素粒子	助 手	野 崎 光 昭	61. 4. 1	配 置 換	物理学科から
数 学	助 手	中 山 昇	"	採 用	
物 理	助 手	大 栗 博 司	"	"	
"	助 手	多 田 哲 也	"	"	
化 学	助 手	有 賀 哲 也	"	"	
"	助 手	赤 木 右	"	"	
生 化	助 手	渡 辺 雄一郎	"	"	
動 物	助 手	松 島 俊 也	"	"	
素粒子	助 手	梶 田 隆 章	"	"	
"	助 手	福 永 力	61. 5. 1	"	
化 学	助 手	齋 木 幸一朗	61. 5. 16	配 置 換	工学部から
(職 員)					
事 務	事務長補佐	蓮 見 公 一	61. 1. 1	昇 任	庶務主任から
植物園	技 官	高 崎 和 彦	61. 2. 16	採 用	
化 学	事 務 官	新 藤 美 子	61. 3. 1	"	
植物園	技 官	大 塚 靖 夫	61. 3. 31	定年退職	
地 物	技 官	友 田 幸 子	"	"	
事 務	技 官	石 渡 丈 夫	"	"	
天 文	事 務 官	仲 野 喜美子	"	"	
人 類	用 務 員	井 上 常 次	"	勸しょう退職	
化 学	技 官	今 井 勲	"	勤務延長終了による退職	
物 理	事 務 官	橋之口 珠 代	61. 4. 1	採 用	
"	事 務 官	角 田 照 子	"	転 任	高エネルギー物理学研究所へ
地 質	技 官	吉 田 英 人	"	採 用	
物 理	技 官	永 江 知 文	"	"	
化 学	技 官	川 島 孝	"	"	
植物園	技 官	秋 山 忍	"	"	
事 務	事 務 官	三 沼 仁	"	"	
物 理	事 務 官	高 井 由美子	"	"	
事 務	事務長補佐	福 井 保 男	"	昇 任	原子力研究総合センター事務長へ
"	経 理 掛 長	小 嶋 壮 介	"	配 置 換	生産技術研究所用度掛長へ
"	事 務 官	中 村 次 郎	"	昇 任	医学部大学院掛主任へ

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
事務	事務官	阿部 禎辰	61. 4. 1	配置換	事務局人事課へ
"	事務長補佐	土居 喜公	"	昇任	東洋文化研究所総務主任から
"	庶務掛長	堀内 勉	"	配置換	大型計算機センター共同利用掛長から
"	経理掛長	大橋 悟	"	"	大型計算機センター会計掛長から
"	教務掛主任	金子 博	"	採用	
"	人事掛長	橋本 勝真	"	配置換	庶務掛長から
物理	技官	渡辺 重夫	61. 5. 1	"	大型計算機センターへ

外国人客員研究員

所属	受け入れ 教 官	国籍	氏名	現職	研究員期間	備考
情報	榎本助教授	フランス	Dominique Sotteau	フランス科学院講師	61. 5. 1 } 10	
動物	代谷教授	イスラ エ ル	Zor. Uriel	ワイツマン科学研究 所助教授	61. 4. 15 } 31	

昭和61年 3月28日卒業者

数 学 科

岩 橋 祐 輔	大 澤 憲 一	大 原 淳	大 場 清
佐々木 徹	塩 谷 賢	志 村 隆 彰	橋 口 徳 一
古 田 兵 治	美 馬 慎 太 郎	山 田 順 之 介	横 谷 荘 一 郎
申 貴 子	赤 木 徹 哉	厚 地 淳	有 吉 一 彦
池 田 和 正	井 上 淳 一	上 野 弘 一	榎 本 博 人
大 湾 秀 雄	岡 田 浩 一	岡 田 靖 則	小 木 曾 啓 示
神 山 靖 彦	河 内 宗 和	北 林 誠	雲 幸 一 郎
小 松 真	小 山 信 也	佐 藤 文 一	塩 谷 真 弘
島 田 伊 知 朗	示 野 信 一	関 川 浩	野 村 周 二
服 部 俊 昭	早 川 千 里	平 尾 哲 宏	平 栗 郁 朗
藤 原 耕 二	松 村 誠	森 下 昌 紀	守 本 晃
山 岸 正 和			

(45名)

情報科学科

岩田吉弘	浅香暢康	岡本一	久島伊知郎
小師隆	鈴木浩之	関聡司	高田広章
高橋玲二	竹内孝明	鳥居秀行	濱野純
町田幸子	松岡聡	大和俊太	吉川永一

(16名)

物理学科

久保木一浩	近藤秀治	谷口和久	平田慶子
浅川正之	秋山英文	家田明	井澤毅
石井康人	石村直之	磯暁	市村厚一
井手真也	伊藤啓	伊藤伸泰	今井卓
今宮賢一	上田正仁	梅木誠	江藤幹雄
應田治彦	大熊利昭	尾形修司	小田島仁司
小野瑞城	唐津正之	栗田和好	小林功佳
小島津佳弘	定村正	瀧澤聡	多田司
田中和廣	手塚好弘	寺崎亨	豊浦潤
内藤正光	仲尾由雄	中澤康浩	中村岳史
沼田乾	野原博	長谷川琢哉	針谷喜久雄
松野俊一	村上佐知子	村山齐	矢嶋徹
山口敦史	山下崇	湯浅哲也	米山一弥
渡邊康			

(53名)

天文学科

青木哲郎	秋山和英	神戸栄治	高野徹
橋本修	村田泰宏		

(6名)

地球物理学科

關堅	中島義成	市川武史	今西祐一
岩口敏史	角間和男	上川俊一	北和之彦
北山正信	久世暁彦	佐藤正樹	杉澤靖彦
高橋秀和	竝木則行	沼口敦	林宏典
二神常爾	室町幸雄	安田敦	矢吹哲一朗
渡邊誠一郎	渡邊了		

(22名)

化学科

郷正博	中島正彦	中村浩士	麻薙幸雄
雨谷敬史	天川裕史	天津裕之	石田尚行
石橋孝章	伊藤真貴子	伊藤幸紀	伊理由加利

岩岡道夫
北村恭子
狐塚美絵
沢邊恭一
田中稔祐
豊田真司
林博郎
間瀬一彦
八木潔
渡邊和俊

垣田信吾
木原勉
酒井潤
関敬一
田沼敏弘
中村哲生
半田敬信
松田育美
山田朋代

北澤孝史
窪田秀樹
佐藤貴裕
高野秀路
田野崎康雄
野口巧
堀本幸嗣
南川博之
吉田弘

北島富美雄
小島聡志
佐藤幸弘
多田博一
田村雅史
橋本正人
前田和之
森光司
吉武英昭

(49名)

生物化学科

近藤哲朗
佐藤健人
中山周一
星美奈子
宮田愛彦
渡部和加子

藍澤広行
進藤義夫
西村実和
前田達哉
室屋賢康

石原健
鈴木謙二
春木満
松崎修
森田倫子

小池克宏
反町洋之
東伸昭
松原弘行
柳田光昭

(21名)

生物学科 (動物学)

高桑徹也
西川定男

白石篤史
長谷川健

高橋雄
早坂和晃

中山真一
山田章

(8名)

生物学科 (植物学)

出田立郎
桑田晃
鈴木武

澤井昭司
河野匡
松本英明

荒木崇
齋藤浩二
元永拓郎

小野良平
佐野芳史

(11名)

生物学科 (人類学)

奥田佳延

小田美佐

河村正二

濱井美弥

(4名)

地学科 (地質学, 鉱物学)

青山亨
佐藤幹夫
成瀬茂夫

柿井弘
白坂徳彦
山田紀子

倉中聡
田村芳彦
山本一夫

齋藤潤
寺本昌央

(11名)

地学科 (地理学)

加藤茂弘	芳賀一彦	佐藤義文	島津弘
青木宏人	岩田和佳	古庄淳浩	佐藤雅文
千葉聡	松本和人		

(10名)
(合計 256 名)

海外渡航者

(6カ月以上)

所属	官職	氏名	渡航先	期間	目的
素粒子	助手	竹下徹	スイス	3.10～ 61. 12. 20	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
地質	教授	久城育夫	アメリカ合衆国	3.24～ 62. 3. 23	実験岩石学の研究のため
数学	助手	深谷賢治	ドイツ連邦共和国	3.31～ 62. 4. 1	幾何学の研究のため
素粒子	〃	真下哲郎	スイス	3.31～ 7. 21	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
〃	〃	川本辰男	スイス	3.31～ 62. 9. 30	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
〃	〃	福永カス	スイス	5.22～ 63. 5. 21	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため

○昭和61年度科学研究費補助金採択 (内定) さる

本年度科学研究費補助金の交付申請に対し、このたび、本学事務局経由で同補助金の採択 (内定) 通知がありました。(特別最近研究(1)(2)は除く)

理学部関係の申請件数および採択件数は次表のとおりで、総額 572,130,000 円 (遺伝子実験施設 1,600,000 円: 外数) でした。

昭和61年度科学研究費補助金理学部申請・採択件数一覧表

昭61. 6. 1 現在

研究種目	申請件数	採択件数			採択率
		新規	継続	計	
自然災害特別研究(1)	2	2		2	100.0%
自然災害特別研究(2)	1			0	0

研究種目	申請件数	採択件数			採択率
		新規	継続	計	
環境科学特別研究(1)	1	1		1	100.0%
環境科学特別研究(2)	2	1		1	50.0
エネルギー特別研究 (核融合(1))	0	0		0	0
エネルギー特別研究 (核融合(2))	2	1		1	50.0
特定研究(1)	13	10		10	76.9
特定研究(2)	29(1)	10	1	11	37.9
総合研究(A)	22(10)	4	10	14	63.6
総合研究(B)	8	3		3	37.5
一般研究(A)	19(3)①	8	3	11	57.9
一般研究(B)	57(17)①	12	16①	28①	48.3
一般研究(C)	87(10)	26	10	36	41.4
奨励研究(A)	71	54		54	76.1
試験研究(1)	8(1)	3	1	4	50.0
試験研究(2)	20(2)	1	2	3	15.0
計	342(44)②	136	43①	179①	56.8

() 継続申請：内数
○ 遺伝子実験施設：外数

東京大学職員の永年勤続者表彰

昭和61年3月31日付で退職される職員に対する総長表彰状、記念品が3月26日(水)正午、学部長室において、有馬学部長から伝達された。

記

(事務) 石渡 丈夫
(数学) 桐村 康子
(天文) 仲野 喜美子
(地物) 友田 幸子
(化学) 今井 勲
(人類) 井上 常次
(植物園) 大塚 靖夫

昭和61年4月12日(土)午後3時から、神田学士会館において、永年勤続者表彰式があり本学部勤務者のうち次の5名の方が表彰を受けた。

記

(事務) 堀内 勉
(事務) 橋本 勝真
(天文) 田中 済
(生化) 谷本 薫
(中間子) 塩見 イソコ

理学部長と理職の交渉

理学部長と理職（理学部職員組合）の交渉は昭和61年3月17日、4月21日に行なわれた。

主な内容は以下のとおりである。

(1) 技術系職員の専門行政職俸給表への移行について

理職は第二次案（文部省案）についての見解を尋ねた。学部長は第二次案が出された後に、「国大協第四常置委員会黒木委員長と会い2つの官職に別れて、そのまま移る道を閉されるのでは困るので移行できる道を制度的に開いてほしいと意見を伝えた」と答えた。

(2) 昇格について

理職は行(一)技術6級、5級、4級、行(一)事務および図書の5級、4級、3級の昇格対象者について、早期に昇格が実現するよう要求した。

学部長は努力したいと述べた。

(3) 継続事項について

行(二)から行(一)への振替え、定員外職員の定員化、教務職員の助手化、勤務延長等についての要望に対して、学部長は引きつづき努力すると述べた。

各号館（運営委員）長名簿

(61.4.1現在)

号館名	所属	職名	氏名	内線番号	任期
1	物理	教授	清水忠雄	4167	61.4.1～62.3.31
2	植物	教授	飯野徹雄	4465	61.4.1～61.7.31
3	地球物理	教授	佐藤良輔	4293	61.4.1～63.3.31
4	物理	教授	小林俊一	4157	61.4.1～62.3.31
5	地質	教授	飯山敏道	4514	61.4.1～62.3.31
化学	化学	教授	富永健	4346	61.4.1～63.3.31

教室主任・施設長等名簿

(昭61・4・1現在)

教室・施設名等	教室主任 施設長等	電話番号	自宅電話番号 (緊急連絡先)
数 学 教 室	小 松 彦三郎	4047	
情 報 科 学 教 室	国 井 利 泰	4116	
物 理 学 教 室	上 村 洸	4225	
天 文 学 教 室	堀 源一郎	4257	
地 球 物 理 学 教 室	松 野 太 郎	4294	
化 学 教 室	富 永 健	4346	
生 物 化 学 教 室	酒 井 彦 一	4396	
動 物 学 教 室	上 田 一 夫	4436	
植 物 学 教 室	飯 野 徹 雄	4465	
人 類 学 教 室	尾 本 恵 市	4482	
地 質 学 教 室	飯 山 敏 道	4514	
鉱 物 学 教 室	武 田 弘	4543	
地 理 学 教 室	阪 口 豊	4571	
臨 海 実 験 所	水 野 丈 夫	4431 0468 (81)4105~7	
植 物 園	岩 槻 邦 男	(814) 0138~9	
地 球 物 理 研 究 施 設	小 口 高	4590	
分 光 化 学 セ ン タ ー	黒 田 晴 雄	4331	
中 間 子 科 学 実 験 施 設	宮 澤 弘 成	4133	
地 殻 化 学 実 験 施 設	富 永 健	4346	
素 粒 子 物 理 国 際 セ ン タ ー	小 柴 昌 俊	4231	
遺 伝 子 実 験 施 設	飯 野 徹 雄	4465	
学 部 長	有 馬 朗 人	4000	
評 議 員	飯 山 敏 道	4514	
評 議 員	朽 津 耕 三	4334	
事 務 長	戸 張 喜 之	4001	
事務長補佐(総務担当)	蓮 見 公 一	4002	
事務長補佐(経理担当)	土 居 喜 公	4004	
学 務 主 任	田 中 満 嘉	4003	

原稿投稿のお願い

今回はキャンパス問題を含めた、理学部の将来についての議論を盛んにするため、その呼び水として、学部長 有馬先生を始め、名誉教授、先輩を含めて5人の先生に理学部に対する感想、その将来についての提案や意見をなるべく provocative にとお願いして執筆していただきました。現在これらの御意見について、又は独自の立場から大学院を含めた理学部の将来を論じた投稿を集めた特集号を企画しております。

名誉教授から助手までを含む広い領域の方々の投稿を期待いたします。研究所や他学部からの御意見も歓迎します。用紙は自由ですが400字詰め原稿用紙4～6枚程度。締切は7月末日、理学部化学教室 佐佐木宛お送り下さい。

(佐佐木記)

編集：

佐佐木 行 美 (化学)	内線	4359
佐 藤 勝 彦 (物理)		4207
松 野 太 郎 (地物)		4294
高 橋 正 征 (植物)		4474
田賀井 篤 平 (鉱物)		4544